

本編 19 「第一大『犍度』」 その 8 「サッサパ三兄弟と神通力合戦」 2020.11.14

○ウルヴェーラーにも悟らせるべき修行者が

註釈：61人の阿羅漢は、雨期が明けて全員が阿羅漢になったということ。若者ヤサと54人の友人は、以前、一人の妊婦が亡くなっているのを見て墓場に運んで火葬した。若者ヤサと最初の五人の友達は焼きながらその遺体を観察して不浄想 *asubhasañña* を得た。後で、残りの友人にも話し、家に帰って父母と妻にも話し、全員が不浄想を得ていた。

(→ゆえに、父母と旧妻は説法を聞いただけで預流果に悟れた。ヤサさんと友人はすぐに阿羅漢に悟れた。)

最初の雨期が明けて、釈尊は61人の阿羅漢たちにあらかじめ告げた通り、ウルヴェーラーに向かう。(ヴェーラーナシーから東に戻って成道の地ブダガヤの少し南側。次に向かうマガダ国の首都ラージャガハはさらに東にもう二日くらいの距離)

長兄ウルヴェーラ・カッサパには500人の弟子。

次兄ナディー・カッサパには300人の弟子。

末弟ガヤー・カッサパには200人の弟子。合計で千人。

まず、長兄ウルヴェーラ・カッサパの庵 *assama* に行き、「よろしければ、あなたの火堂 *agyāgāra* で一夜を過ごさせてください」。「私は構いませんが、そこには猛毒で神通ある蛇王がいます。それがあなたを害してはいけません [からダメです]」。…三度…「たぶん *app eva* 害さないでしょう。さあ *iñgha*、許可してください」。「お好きなようになさい」。

蛇王の煙には釈尊も煙、火には火を放ち、火堂が光り輝いた。ウルヴェーラ・カッサパは釈尊が焼け死んだと思った。蛇王の火(神通)は尽きたが、釈尊はさらに五色の光の火を放った：

青 *nīla*、赤 *lohita*、茜色 *mañjetṭha*、黄色 *pīta*、水晶色 *phalika*。→仏旗。

翌朝、神通が滅せられた蛇王を釈尊が鉢に入れて見せた。ウルヴェーラ・カッサパは「この大沙門は大神通を持っている。しかし、私のような阿羅漢 *arahā yathā aham* ではあるまい」と思った。ただし、釈尊に信心を持ち、「ここにお住みなさい。常に食をお布施します」。①

カッサパの庵に近い森に住んだ。四天王が夜に訪れ、森が輝いていた。翌朝、食事の用意が出来たと告げに来たカッサパが夜に森が輝いていたわけを尋ねる。四天王が説法を聞きたくて来ていたと答える。「この大沙門は大神通……私のような阿羅漢ではあるまい」。②

帝釈天が夜に訪れ、釈尊の庵が輝いていた。③ 梵天サハンパティが。④

○天耳通

ある日、カッサパたちが法要をおこなう。そのためマガダ・アング国の大勢が食物をもってお布施する。カッサパは「今日はあの大沙門が来ないといいなあ。彼が大衆の面前で神通を使うと私の人気が取られてしまうから」と思った。

釈尊は意をもって意で考えたことを知り *cetasā cetoparivitakkam aññāya*、その日はウッタラクル（ヒマラヤの向こう側と言われている）に行き、そこで得た托鉢食をアノータッタ池で食し、そこで午後を過ごした。

→『島史』では、この日、日帰りでマヒヤンガナに初来島した、と。

翌朝、「大沙門よ、食事の準備ができました。ところで、昨日はどうして来られなかったのですか？」「昨日は法要で、私が行くと、あなたの人気は下がるなあと思いませんでしたか？ 私はウッタラクルで過ごしました」。⑤（天耳通①）

○帝釈天が奉仕……その他の神通

釈尊が糞掃衣を手に入れた。「どこで洗おう？」。帝釈天が池を作る。「どこで擦ろう」。帝釈天が石を置く。「どうやって池から上がろう？」カクダ樹の天人が枝を伸ばす。「どうやって衣を乾そう？」帝釈天が石を置く。

翌朝、「大沙門よ、食事……以前は池がなかったのに……どうして？」。⑥

ある朝、食事の時間を知らせに来たカッサパに先に庵に戻らせ、釈尊はエンブダイ（インド・世界）の名の由来であるジャンブ樹の果を取り、先に火堂に行き座った。⑦ アンバ樹⑧ アーメラキー樹⑨ ハリータキー樹⑩ 三十三天のパーリチャッタカ華（天界に食物なし。香りはある）⑪（高速移動）

カッサパが火祭り *aggī paricaritum* のために薪を割ろうとして出来なかった。「あの大沙門の力であろう」。「カッサパよ、薪を割りなさい」「あなたが割ってください」。五百の薪が瞬時に *sakid eva* できた。⑫

火祭りの火を燃やせない……⑬。火祭りが終わっても消せない……⑭

寒い冬の夜の八日（新月と満月の間が十五日・二週間。半月までは八日・一週間）祭と次の八日祭との間 *antarattṭhakāsu*、雪が降る頃、ネーランジャー河で、[カッサパと五百人の] 修行者たちは、浮いたり沈んだり [の沐浴行] をしていた。そこに世尊がちょうど五百の焚き火を化作し、修行者たちは [水から] 出て火で温もった。⑮

○ついに入信

あるとき、時ならぬ大雨が降り、大洪水が生じた mahā-udaka-vāhako sañjāyi。世尊のおられる場所も水に覆われた。釈尊は考えた。「四隅に水をどけて、真ん中の乾いた土地で歩く瞑想をしましょう yaṃ nūnāhaṃ samantā udakaṃ ussāretvā majjhe reṇuhat[*t*]āya bhūmiyā caṅkameyyaṃ.」。カッサパは「あの大沙門を水に漂わせてはいかん」と弟子たちを連れて舟で釈尊のいる森に行って、そのように水の底のない地面で歩いておられるのを見た。「大沙門よ、あなたはここにおられるのですか?」「カッサパよ、私はここにいます」と答えて、虚空を飛び上がって vehāsaṃ abbhug[abhi-ud-]gantvā 舟に降り立った。⑩

カッサパ：「この大沙門は大神通を持つが、阿羅漢である私には及ぶまい」。釈尊は「この愚人 moghapuriso はまだそんなことを思っている。感服させよう saṃvejeyyaṃ」と考え、「あなたは阿羅漢でも阿羅漢向でもなく阿羅漢に達する道も知らない」と指摘。(天耳通②)

それでハッとして、カッサパは出家を願い出る。

「あなたはそれでもいいが、弟子たちの今後も尋ねてあげなさい」。

カッサパ「我が弟子たちよ、私はこの大沙門の弟子になります。あなた方は随意になさい」。「我々は久しくこの大沙門を信楽していました abhippasannā。もし師匠が弟子入りするなら私たちが弟子入りします」。

剃髪し火祭りの道具などを全部、河に流し、「ehi bhikkhu 来たれ比丘」出家。

※神通は六種類。六神通。 藤本晃『ブッダの神通力』サンガ

①神足通「様々な神変」：物質に影響を与えるものすべて。

②天耳通：遠方の聞こえないはずの言葉（と、言葉になるほど明瞭な思考）を耳根ではなく意で知る。

③他心通：悟りや禅定の段階、恐れている、欲しているなど、他者の心のレベルを知る。

以上の三つは世間的な神通。以下の三つは悟りに直結する神通。

④宿命通：自分の前世を幾つも遡る。

⑤天眼通：他者の転生を「ここで死んだ。あちらで生まれた」と、一つ分、知る。

千里眼を天眼ということもあるが、千里眼は正確には①「さまざまな神通」。

⑥漏尽通：解脱という智慧が最上の神通とも言われる。

※神通を作るため必要な四神足（意欲 *chanda*、精進 [勤] *viriya*、心 *citta*、観察 *vīmaṃsā*）は、そのまま悟りに至る道、三十七菩提分の一つ。

三十七：四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八聖道。

ここで見せた神通力は六つのうちの最初の「様々な神変」と第二の天耳通だけ。

○次兄も末弟も弟子に

次兄ナディー・カッサパは兄たちの道具が河を流れてくるのを見て、「兄に災厄のなからんことを」と心配して弟子三百人と訪ねた。

具寿ウルヴェーラ・カッサパを見て、「[兄] カッサパよ、これがより優れた [道] *idam seyyo* ですか?」「そうです。これがより優れた [道] です。」

次兄と三百人の弟子も道具を河に流して剃髪して→「来たれ比丘よ」。

末弟と二百人の弟子も→「来たれ比丘よ」。

○ガヤーシーサ（象頭山）で火の説法

ウルヴェーラーに随意の間滞在し、ガヤーシーサに千人の大比丘衆と登った。「すべては燃えている *sabbam ādittam*。すべては燃えているとは何か：

眼は燃えている。色は燃えている。眼識は燃えている。

眼に触れるものが燃えている *cakkhu-samphasso āditto*。

眼に触れて生じる楽、苦、不苦不楽と感受されるそれもすべて燃えている

Yad idam cakkhu-samphassa-paccayā uppajjati vedayitam sukham vā dukkham vā adukkhamasukham vā tam pi ādittam。

何に縁って燃えているのか。貪の火によって、瞋の火によって、痴の火によって燃えている。

生老病死愁悲苦憂悩によって燃えている。と私は言います *ti vadāmi*。

耳…鼻…舌…身…意…。と、私は言います。

比丘たちよ、このように観る多聞の聖なる比丘は眼において厭離します *nibbindati*。色…眼識…眼に触れるもの…眼に触れて生じる…厭離します。

耳…鼻…舌…身…意…において厭離します。

厭離すれば、離貪します。離貪すれば解脱します。解脱すれば「解脱した」という智が生じ、「生まれは尽きた。梵行は成し遂げられた。為すべきことを為し終えた。今生より後の生はない」と知ります。

この説法が終わったとき、千人の比丘たちはみな、執着がなくなり、諸漏より心が解脱した。